
Hori meets Girl

ミスタ ~ forest

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

H o r i m e e t s G i r l

【Nコード】

N 4 1 1 0 B

【作者名】

ミスタ〜f o r e s t

【あらすじ】

執筆中、作者はわめいた。「こんなの『あつさむ』じゃない！」
本編から弾き出された、禁断の特別編。その主人公は、なんと……

その一（前書き）

この小説は、私が連載している『暑さも寒さも彼岸まで』のスピノフです。

読んでいない人には解らない箇所もあるでしょうが、そういう人は置いていきます。

その一

ある日の放課後。

閑散としている図書室に、二人の男性が居た。

一人は、冷たい雰囲気を放つ目をしており、ノートパソコンに向かってキーボードを打っている。

一人は、その気になれば性別を誤魔化せそうな顔をしていて、静かに本を読んでいた。

夕日が窓から差し込み、室内を赤く照らす。

キーボードを打つ音と、ページを捲る音だけが、室内に響いていた。

「あの、棗先輩。僕、偶に思っんですけど……」

唐突に、本を読んでいる方が静寂を破る。

棗と呼ばれた男性は、目線で続きを促した。

それに従い、彼は話を続ける。

「物語の主人公の様な人生って、憧れますよね。特に、漫画やライトノベルの主人公は。」

何か特異な能力を持っていたり、次々と波乱を潜り抜けたり……。

僕は今でも、生まれ変わるなら彼らの様になりたいって思っています」

この言葉に、棗は手を止め、見下した様な溜め息を吐いた。

「愚かしい。虚構は第三者として傍観しているから面白いのです。

当事者に成ってしまえば、其の様な勘えは出来ませんよ。

特に堀さんは、主人公の荷を背負える様な人ではありませんし、ね」

そして、溜め息混じりに述べる。

堀と呼ばれた男性は、少し不満げな表情を浮かべ、

「棗先輩には、僕の気持ちなんて解りませんよ。

文芸の能力に秀でていて、地位は現美研の副部長。

遊戯銃術の誉れ高く、十六夜の使徒の二つ名を持つ。

もし漫画やライトノベルの世界なら、主人公になっても不思議じゃありませんよ」

恨めしそうに言った。

棗は再び、大きく溜め息を吐く。

「其処迄云うのでしたら……其の身を以て試してみますか？」

「……え？」

その瞬間、堀は目の前が真っ暗になった。

「兄貴、起きろ。……兄貴！ 兄貴ってば！」

「ん……あ……？」

揺さぶられる感覚を覚え、堀は目を覚ました。
半分眠っている目で、周囲を見渡す。

ここは自分の部屋。そしてベッドの上。

自分を起こしてくれたのは、妹だ。

妹と言っても、生年月日は同じで、産まれたのはほんの数分差。

二卵性双生児だからなのか、自分とは正反対の女性である。

「僕が渚^{なづな}に起こされるなんて……。今、何時です？」

眠い目を擦りながら、堀は渚に尋ねる。

渚は、目覚まし時計を彼の眼前に突き付けた。

それを見て、堀は顔色を変える。

ベッドから飛び起き、大慌てで学生服を手取る堀に、渚は溜め息を吐いた。

「兄貴が起こしてくれないから、オレもちょっと危ないんだぞ」

「だったら自分で起きる努力をして下さい！」

慌てている所為か、渚への返答も切羽詰まったものになる。

寝巻を脱ぎ始めた堀に背を向け、渚は部屋の出口に向かった。

「……が起こ……るのが良……けどな……」

「何か言いました？」

「いや、何も。朝飯はオレが用意しといたぞ。」

じゃ、先行くから。……あーあ、ウチのトコは遅刻に厳しいのに……」

溜め息混じりに呟きながら、渚は家を出ていく。

堀は、いつもの通学路を、いつも以上に急いで駆けていた。

こういう時だけは、文化系の柔い肉体が恨めしい。

普段なら、もっと余裕を持って家を出ているのに。

朝食も、自分と渚の弁当も作り損ねてしまった。

今日の昼食だけは購買で買う事にして、彼女にもそうして貰う事にしよう。

そんな事を考えていた所為か、飛び出してきた人影に対応する事が出来ず、

「きゃ!？」

「ひゃあ!？」

衝突してしまった。

思いつきり尻餅をつき、意識が少し混乱する。

「いたたた……ご、ごめんなさい! 私つてば急いでて……」。

あの、大丈夫ですか? 怪我してませんか?

我に返って前を見ると、相手も同様に尻餅をついていた。

自分と同じくらいの年頃の少女。

身長も、自分と同じくらいの百六十センチ辺りと目算する。

無駄の無い綺麗な身体は、維持するのに如何ほどの労力が要るのだろうか。

言葉通り心配そうに向けられた瞳は、果ての無い奥底に飲み込まれそうな程に深い。

栗色の長い髪が、身動きに合わせて揺れながら、美しい光沢を放っていた。

よくよく見れば、自分の高校の制服である。

少なくとも、自分は見た覚えの無い女性だが。

「い、いえ。僕は問題無いで……」

答えようとして、ふと言葉を詰らせる。

彼女の容姿に奪われた目が、最終的に行き着いた先は……。

「……白……」

「……………」

堀の呟きに、少女は最初、怪訝な表情を浮かべる。

だが、すぐにその言葉の意味に気付き、彼女は頬を真っ赤に染めた。

急いで、スカートを押さえつつ立ち上がる。

堀の視界から消える白。

少女は、数十センチ離れた所で中身を吐き出していた鞆を手に取り、

「バカ——！」

殺気を感じた時には遅過ぎた。

何か固い物が、堀の横顔を直撃する。

起こしていた上体が、叩き付けられる様に地を嘗めた。

激しい衝撃に脳内が揺れる中、凶器が鞆である事だけは認識出来る。

堀を一撃でKOした少女は、煮え繰り返った表情で去っていった。

どうにか間に合った堀が、朝のHRから頭を抱えていたのは、まだ患部が痛むからではない。

「今日からこのクラスで共に学ばせて頂く、しづみ渋谷京子です。

至らない点もあると思いますが、何卒よろしくお願いします」

さっき殴られたばかりの、白が印象的だった少女が、自己紹介をしているからだ。

まるで、物語の世界の様な偶然である。

「じゃあ……その席が空いてるから」

教師に促され、京子は指定された席に向かう。

そこは、

「……ふん」

堀の隣の席だった。

案の定、京子の表情は冷たいものだ。

席に座ると、明らかに意図的に、堀を視界から外した。

今まで、多少地味ながらも平穏な学生生活を過ごしてきたつもりである。

だが、それにも翳りが見え始めた様だ。

「ふーん、そんな事があつたんだ」

休憩時間になり、堀はアリスと真琴に今朝の事を話した。

授業が非常に気まずくて集中出来ないのも、もう形振り構ってられない。

真琴が「望月さんも、今日は白っスよ」と言った時は、少し不安を覚えたが。

「堀さん、大丈夫っス。寧ろチャンスっス」

「どうして……ですか？」

自信有り気に言う真琴に、堀は怪訝な表情を浮かべた。

「きつと、それはフラグっス。転校生にありがちなパターンっスよ」

そんな堀に、真琴はあくまでも自身たっぷりに述べる。

もちろん、その自信の出所は定かではない。

「もつと真面目に考えて下さいよ、漫画や小説じゃあるまいし。」

僕は只、ありのままに今起こった事を話しているだけなんですから」

堀は、真琴を咎める様に言った。

不安が的中し、いよいよ前途多難な雰囲気が漂う。

こうなると、アリスに一縷の望みを託すしか無いのだが、

「良いなあ、ボクもそんな初登場が良かった……」。

押し倒してもキスしても既成事実作っても、全部事故に出来たのに

「……」

それも途切れてしまった。

堀は溜め息を吐き、自分の席に戻る。

放課後に、藤原や秋原を頼ってみる事にしよう。

それまでは、ひたすら耐えるだけだ。

「冗談っスよ、冗談」

「もう、お約束を解つてないなあ」

二人が、苦笑しながら堀の側へ歩み寄る。

幸い、今は京子は居ない。

「ボクが仲を取り持ってあげるよ。転校生の気持ちは、それなりに解つてゐるつもりだから。」

きつと、転校初日だから独りで淋しいと思うんだ。そこに付け込めば、心も体も思いのままだよ」

アリスが、弾んだ笑顔で提案した。

明らかに何か思い違いをしている様だが。

とは言え、自分一人では無理があるのも事実。

協力してくれるのだから、ここは素直に甘えよう。

「判りました。よろしく願います」

そう考えた堀は、二人に頭を下げた。

昼休みの教室。

京子は、自分の席で、一人で弁当を食べていた。

そんな彼女を、遠巻きに見ている生徒が三人。

「じゃあ、ボクが渋谷さんを上手く宿めるから、マコちゃんは頃合を見て堀君に合図してね。」

で、その後は堀君の漢つぷりに任せるから」

「了解っス」

「判りました」

確認を取ると、

「アリス、行っきまーす」

声を弾ませて、アリスは京子のもとへ向かった。
その様子は、『初めてのおつかい』と銘打っても不思議ではない。
実際、真琴は、慈しむ時の瞳でアリスを見守っている。

「やつほー」

京子の隣まで行くと、アリスは気さくに声を掛けた。
自分に向けられた言葉である事に少し遅れて気付き、京子はアリスの方を向く。

「な、何ですか？」

その返事は、大量の戸惑いを孕んでいた。

初めての環境で、初めて会う人に、ここまで親しげに声を掛けられたのだ。

焦ってしまうのも、無理は無いだろう。

「初めまして、同じクラスの望月アリスです。よろしくね、シブシブ」

「し、シブシブ……？」

それにも構わず、アリスは自己紹介をし、京子にニックネームを付ける。

アリスにとっては恒例行事だ。一部の例外を除いて。

由来は、本人によると、

「渋谷だからシブシブだけど……ダメかな？」

という事らしい。

アリスの勢いに押されたのか、京子はぎこちなく頷いた。

「で、話があるんだけど……」

万全の皮切り——少なくとも、アリスはそう思っている——から、アリスは本題に移る。

「シブシブの隣の席の……堀君の事なんだけど……」

「……………」

同時に、京子の表情が、不機嫌にそれになった。

少し気まづくなり、アリスは一瞬たじろぐが、すぐに話を続ける。
「堀君もワザとじゃないし、反省してるみたいだし、許してくれないかな？」

キミが隣だから、尚更気に病んでいるんだよ。

勝負下着見られた訳じゃないんだし、根に持つ程胸が小さい訳じゃないでしょ？」

共学の学校とは思えない発言も、アリスは完全に無自覚である。

京子は両腕で胸を隠しながら、

「……『胸が狭い』？」

アリスの誤字を訂正した。

そして、小さく溜め息を吐き、

「言いたい事は解るわよ。私だって、いつまでもネチネチ言ってくる人は嫌だし。」

……でも、こつちが心配してるのに、あつちは下着を眺めてたなんて、納得出来ない。

好きな人にも見せた事無いのに……好きな人居ないけど。

自分の内側を晒け出せる様な人が現れるまでは、貞操を守りたかったの。……解る？ 傷物にされた私の気持ち」

愚痴る様に述べた。

京子に問われたアリスは、

「うんうん。『初めて』は心に決めた人に捧げたいよね。

ロマンチックな場所で、ロマンチックなシチュで、ロマンチックに奪われない気持ちは解るよ。

なのに堀君ってば……カワイイ顔して不潔なんだから」

何の為に話し掛けたのか解らない程に共感していた。
しかも、明らかに話が繋がっていない。

果たして、どこでねじ曲がってしまったのだろうか。

『気の合う人』と認識したのか、京子は更に話を続ける。

「こんな話してきたって事は、あいつの友達？ ……やっぱり、貴女も何かされたりしたの？」

「うっん、ボクの夫の友達だよ。」

何かされた記憶は無いけど、堀君って個性も存在感もオーラも無いから、気付いてないだけなのかも……」

アリスの発言に一部虚偽が有るが、堀にとっての問題はそこではない。

こうして、どんどん話が変な方向に発展していった。

「堀さん、今こそ発進っス！」

「無理に決まってるじゃないですか！」

その一（後書き）

・実は、『明なら働いてみよ光なら学んでみよ』連載の傍らで書いてた

・これを載せれば、決して私が執筆をサボってた訳ではない事を理解して貰えるかも知れない

・でも、本編はまだ働学編を連載中

・しかも、HG編も未完成

・なら、新しい連載にしてしまおう！

……これが、この作品を新連載で始めた経緯です。
誹謗中傷お待ちしております。

その二

アリスや真琴の尽力も虚しく、状況は一向に改善しなかった。そのまま学校も終わり、堀は一人下校する。

取り寄せていた本が届いたそうなので、本屋に向かうべく歩を進めた。

必然的に通る事になる商店街は、黄昏色に染まっている。

夕方の喧騒も、この時の堀には煩わしいだけだった。

その途中、堀は向こうから来た主婦二人の会話が耳に入る。

「放っておいて良かったのかしら？」

「仕方無いわよ。あいつらに口出ししたら、何されるか……」

「あの娘、この辺じゃ見ない顔だけど……可哀相に」

それを聞き、嫌な予感がしたので、堀は足を速める。

程なくして、それは的中してしまった。

商店街の真ん中で、見覚えのある少女が怒気を露にしている。

「だから、私は、そんなつもりは一切有りません！」

「何だよ、つれない事言うなよ」

それを向けている相手は、数人の男性だった。

ある者はオールバックで、ある者はリーゼント。

ほぼ全員が特攻服を着ているという、今時判り易過ぎる不良だ。

「イイじゃん、ちょっと遊んでくれるだけで良いんだからよ」

「私は、取り寄せていた本を買いに來ただけなんです！ そんな暇は有りません！」

「出来上がった物語より、俺達で紡ぐ新しい物語の方が面白そうじゃねえ？」

「……まさか、格好良い事言ったって思ってますんよね？」

「良いから行こうって……」

男が、強引に京子の手首を掴む。

京子は驚いてその手を振り解き、鞆で彼の横顔を強打した。

突然の衝撃に、男はその場に座り込む、打たれた箇所を手で押さえる。

「つてえ……」

「せめて、人を誘う時の礼儀を憶えてからにして下さい」

あくまでも強硬な態度をとる京子に、男の中で何かが切れた様だ。

「このアマ……！」

立ち上がり、飢えた獣の様な目で京子を睨む。

思わず京子は息を呑み、数歩後退った。

だが、男は一気に詰め寄り、彼女の胸座を掴む。

そして、拳を後ろに引き、矢の様に彼女へと放った。

その数秒後、堀は心底驚いていた。

自分の身体が、何かに引き寄せられる様に京子へと走り、男の拳を受け止めていた事に。

もちろん、男やその取り巻き、京子も驚きを隠せない。

「止めて下さい。嫌がっているじゃないですか」

更に、自分でも信じられない言葉が、よりによって自分の口から飛び出してきた。

遠巻きに見ていた人達の拍手も、まともに聞こえない程だ。

二人の間に割って入り、男の前に立ち塞がる様に移動する。

いつもの自分なら、こんな事はまずしないだろう。

なのに、今は無謀にも一人で飛び出している。

藤原や秋原や棗なら、同じ事を躊躇い無くしていたかも知れない。

だが、自分にはそんな能力は無い。

物語の主人公など、夢のまた夢である。

「何だお前？ 喧嘩売ってんのか？」

不機嫌そうな顔で、男が堀を睨んだ。

取り巻きの連中の視線も、堀に集中している。

——今から土下座でもすれば、許して貰えるでしょうか……？

そんな思いが、堀の脳内を過ぎる。

自分の器以上の行為を避けるのが、『長生き』の秘訣だ。

実際、現代人はわざわざ他人の面倒事に関わったりしない。

だから、昔と比べてとても長生きだ。

自分だって、なるべくなら長生きをしたい。

だが……。

「……………」

後ろから、縋る様な京子の視線を感じ、思い留まった。

今、自分が逃げれば、京子はどうなるのだ。

この状況をどうにか出来るのは、今のところ自分だけだ。

だから、自分がどうにかしなければ。

器がどうだの、主人公か否かだの、そんな事は問題ではない。

ここで退いては、そもそも人間として失格だ。

「彼女に手を出さないと約束して下されば、僕だってわざわざ売りません」

震えそうになる声を抑えながら、堀は事実上の宣戦布告をした。

自分も、どうやら長生き出来ない部類の様だ。

だが、その事を後悔するつもりは微塵も無い。

元々、現代の流行になんて、付いて行けてはいないのだから。

「へえ……そんな事言うんだ」

男が、機嫌の悪そうな声を出し、堀に一步步み寄る。

自分よりも背の高い相手に圧倒されるが、堀は一步も引かなかった。

「地味な面しやがって……姫を護る騎士でも気取ってんのか？」

「名前も無い使い捨てキャラに言われたくありません」

「んだとお！？」

堀の一言で、男は怒りが頂点に達した様だ。

殺気を感じ、堀は京子突き飛ばして離れさせる。

次の瞬間に飛んできた右拳を、右側へのサイドステップでかわした。

——秋原先輩、僕に力を！

堀は、祈る様な気持ちでポケットに手を入れ、閉じている扇を取り出す。

真琴関係の事件が一段落した後に、念の為に秋原から渡された物だ。

もちろん、扇ぐ為の物ではなく、身を守る為の物である。

骨は鉄で出来ていて、紙はエアガン程度では傷一つ付かない特別製。

要にも拘っていて、多少の衝撃で壊れる事は無い。

堀はそれを握り、拳を空振りした男のこめかみを力一杯叩く。

二度目の衝撃に、男は頭を押さえながらその場に崩れた。

予想外の展開に、誰もが驚く。

「つてえ……」

数秒間呻いた後、男は殺気に充ち満ちた目で取り巻きを睨む。

「ボサツとしてんな！ この地味野郎を殺れ！」

男の声で、ようやく取り巻き達は動き出した。

その数、十人以上。

とても逃げ切れない事を悟ると、堀はその場で構える。

まず、突出して突っ込んで来た男の拳を屈んでかわし、鳩尾に鉄扇を突き立てた。

そこを押さええて悶絶する彼の股間を蹴ると、声にならない悲鳴を上げる。

そんな彼の胸倉を掴み、二人同時に来た男の片方に向けて突き飛ばした。

彼が戸惑っている間に、もう片方の側頭を鉄扇で殴る。

続け様に彼にも鉄扇を食らわせ、そのまま流れる様に二人を殴り倒した。

次に拳を振りかぶりながら突進してきた男には、喉への突きをお

見舞いする。

身体が大きい事によるリーチの短さは鉄扇がカバーしているので、相手の拳が届く事無くカウンターが決まった。

拳では勝てないと判断したのか、次に来た男はハイキックを出してくる。

堀は屈んでそれをかわすと、空振りして姿勢を崩したところを狙って、全体重を掛けて肩を当てた。

敢え無く男は吹っ飛び、地面に頭をぶつける。

今度は、前後から男が走ってきた。

先に来た方の拳をサイドステップでかわすと、堀はそのまま背後に回り、両手で背中を押した。

加速させられた男は、もう片方の男と正面衝突する。

続け様に七人が倒され、残りはなかなか手を出せない。

堀は鉄扇を広げ、倒れている男の一人の喉にそれを突き付けた。

「この鉄扇は、秋原先輩から貰った物です。剃刀が仕込んであっても……おかしくないですよね？」

堀の言葉の意味を察し、残っていた男達の顔色が変わる。だが、最初に堀に倒された男は違った。

「くっ……まさか、バックに秋原が居たとは……」。

だがな、別行動している舎弟が、もうじきゾロゾロと来る筈だ。流石に、お前一人じゃ勝てないだろうな」

「それって……あれの事ですか？」

「え？」

男が、堀の指した方向を向く。

男の取り巻きは、すぐ近くまで来ていた。

それでも喧嘩に加われないのは、

「おい、邪魔すんなよ！」

道を塞いでいる人が居るからだ。

それは、一人の女性。

白いブラウスにジーンズを纏っていて、腰にまで届く長い髪を、黒いリボンで結っている。

右腕には買物籠を下げていて、買い物帰りである事が窺える。

堀達が居る側からは背中しか見られないので、それ以上は解らなかった。

「暴力を振るいに行く人を、見す見す見逃す訳にはいきません」

その声に、堀は聞き覚えがあった。

だが、今の声は普段の穏やかな声ではない。

大量の不良に迫られているとは思えない程に、気高く、堂々とした声だった。

「正義のヒロインでも気取ってんのかコラ!? これだけの人数相手に何も出来る訳無いだろ！」

先頭の不良が、女性の眼前に迫って睨み付ける。

それでも、彼女は怯みさえしない。

彼女は小さく溜め息を吐き、買い物鞆に手を突っ込んだ。

取り出したのは、一つの果実。

店で買ったばかりであろう、真っ赤なリンゴだ。

彼女はそれを片手で掴み、力を込める。

すると、リンゴは、信じられないくらいに呆気無く、その形を崩した。

幾重にも亀裂が刻まれ、そこから碎片へと変わっていく。

それらが果汁と共に飛び散り、一面に撒き散らされた。

一部の果汁は、さながら返り血の様に飛び散り、女性に付着する。

その様をまざまざと見せつけられた不良達は、一人残らず血の気が引いていった。

そして、女性は呟く様に問う。

「……血の匂いは、好きですか？」

それと同時に、不良達は思い思いの悲鳴を上げ、蜘蛛の子を散らす様に逃げていった。

「……き、今日はこれくらいで勘弁してやる！」

一部始終を見終えた男は、取り巻きと共に逃げ帰っていった。彼らの背中を見送った後、堀は大きく息を吐き、その場に崩れた。さつきまでは何ともなかった筈の息が、詰まりそうな程に荒くなる。

掌は冷や汗でグツシヨリと濡れており、全身を激しい疲労感が襲った。

未だに、自分のした事が信じられない。

だが、周囲の人々の惜しみ無い拍手は、確かに堀に向けられていた。

離れた所で恐々とした表情で見守っていた京子が、怖ず怖ずと近寄ってくる。

「……な、何で助けたのよ？ 恩でも売ったつもり？」

言葉こそ辛辣だが、それ以外は真逆だった。

頬をうつすらと紅く染め、不自然に目を逸らしている。

そんな京子を見て、堀はにつこりと笑った。

「安心しました。そういう表情も出来るんですね」

「な……ッ！？ ば、バカじゃないの！？ あんな使い捨てキャラ蹴散らしたくらいで好い気にならないで！」

こんなのでチャラにする程、私の下着は安くないんだからね！」

堀の言葉に、京子は更に頬を紅く染める。

必死に否定し、そのままツンと背を向けると、走ってその場を去っていった。

——あの様子なら、僕も絶望的ではありませんね。

堀は安堵し、立ち上がるうとするが、身体に力が入らない。

その時、白い綺麗な手が、堀の前に差し出された。

少し驚いて見上げると、その手が明のものである事が判る。

さつき握り潰したリンゴの果汁が、白いブラウスに染みを作って

いた。

「す、すみません……」

堀は明の手を取り、引き上げられる様にして立ち上がる。

「格好良かったですよ、小さな英雄さん」

笑顔で堀を称えると、明は青果店の方向へ去っていった。

恐らく、リンゴを買い直すのだろう。

堀が家に帰ると、郵便受けに封筒が入っていた。

宛て先に書かれていたのは、妹の名前。

今日はもう帰っている筈なので、堀はそれを渡すべく彼女の部屋へ向かった。

「渚、入りますよ」

ドアの前で声を掛け、ドアノブに手を掛ける。

「えっ、ちょっと待つ……」

渚の戸惑う声が聞こえるが、ほんのコンマ数秒遅かった。

堀がドアを開けると、そこには振り向いたままの状態で固まっている渚。

ベッド脇に在る、全身を映せる大きさの鏡の前に立っていて、着替えの途中の様だ。

下半身から腹部にかけて纏っているのは、大胆なカットイングの競泳水着。

ベッドには、脱ぎ捨てたばかりの制服が散らかっている。

上半身はこれから着衣するところだったのか、覆っているのはスポーツブラのみである。

露になっている背中中は、美しく鍛えられた背筋を誇示していた。数秒の間、二人はそのままの姿勢で固まる。

そして、堀は猛スピードで背を向け、ドアを閉めた。

「す、すみません！ 悪気が有った訳じゃなくて、その……」

学校だけでなく、家でも敵を作ってしまうなんて。

帰る場所が無くなるのはとても困るので、堀は必死に謝っていた。見られている訳でも無いのに、土下座までしている。

「ったく……ちゃんと返事するまで待てよな」

やがて聞こえたのは、呆れながらも怒気は感じられない声だった。堀は、ほっと胸を撫で下ろす。

「もうじき部活でも授業でも水着使うから、サイズが大丈夫か気になっただよ。」

それでもオレは女だし、あんまり小さくなってたら着られないしな……にしても、女つてのはメンドいよな。見るのも見られるのもダメなんてよ」

ドア越しに聞こえるのは、食事の時にも聞かされる世間話や愚痴。どという訳か男勝りな渚にとって、女性というのは何かと面倒らしい。

そんな彼女だからこそ許して貰えた訳で、他の女性ならば殺されていただろう。

「その点、男は見るのも見られるのも大歓迎……不条理もいいトコだよ」

「流石に『見られる』のが好きな方はマイノリティだと思いますけど……」

妬む様に言う渚に、堀は苦笑混じりに言った。

「うーん……ちょっと苦しいかな、これ……」

少し経って、渚の呟きが聞こえる。

どうやら、少しサイズが合わないらしい。

水泳部に在籍し、水着を着る回数が多い彼女にとっては、大きな問題なのだろう。

布の面積が少ない方が速く泳げると聞いた事があるが、その為に見苦しい姿になる訳にもいかない。

堀がそんな事を考えている最中、廊下と部屋を隔てるドアが、内側から開かれる。

出てきたのは、少し小さくなったらしい競泳水着を身に纏った渚

だった。

少なからず戸惑いながら、堀は数歩後退る。

「なあ、兄貴はどう思う？」

当の渚は、至って自然に尋ねた。

例え水着でも、着てさえいれば、見せる事に抵抗は無いらしい。

水泳でバランス良く鍛えられた美しい肉体。

健康的に焼けた小麦色の肌。

本人の意思とは関係無く成長した、二つの膨らみ。

そんな肉体美を、競泳水着は惜しみ無く露出させている。

尋ねられた堀には、

「な、渚がそう思うなら、それで良いじゃないですか」

少し刺激が強かったらしい。

頬を火照らせ、思わず視線を逸らしてしまう。

妹とは言え、渚は年頃の女性なのだ。

こんな姿で出て来られて、全く意識しない訳にはいかない。

そんな堀に渚は苦笑し、再び彼の視界に入る。

「そんな素っ気無い事言うなよ。潔癖キャラ演じようたって、着

替えを覗いた後じゃ無駄に決まってんじゃない」

「そういう問題じゃありませんし、キャラ作りを狙った訳ではあり

ません」

フレンドリーに接しようとする渚を、堀はバツサリと言い捨てる。

「貴女は、事実、女性なんですから。もう少し弁えて下さい。兄と

は言え、僕は男性なんですよ」

少し説教臭くなってしまっただろうか、と堀は思う。

だが、これくらいは言わなければ解って貰えないだろう。

ジェンダーを肯定する訳ではないが、流石に限度がある。

「……………」

その発言の後、渚は堀の身体を観察していた。

徐に二の腕を掴み、

「…………筋力ゼロ」

全身とジロジロと見つめ、

「……透き通る様な肌色」

反応に困る堀を気にも留めず、

「あの……渚？」

「……ソプラノでまだまだいけるな」

出した結論は、

「そう言われても、兄貴は男じゃないし……」

堀にとって心外なものだった。

堀は更に顔を火照らせ、

「な……何て事言っんですか！ 身体的特徴を論うなんて、人間として大問題です！

僕は、貴女をそんな風に育てた覚えは有りませんよ！」

渚の前でのみ見せるお説教モードに突入した。

学校での立場的な問題で、他にこんな事が出来る相手が居ないだけだ。

だから、『見せる』よりも『見せる事が出来る』と言う方が正しい。

「解った解った。オレが悪かったって。つか、兄貴に育てられた覚えも無いけどな」

渚はばつの悪い表情を浮かべ、堀を宥める。

そして、元凶である服を着替える為に、自室へ引っ込んでいった。自分が男性でないのなら、渚も女性ではないじゃないかと堀は思ったが、胸の内に仕舞う事にする。

「……ま、女つてのも悪くないかもな」

ドア越しに聞こえてきた言葉に、堀は怪訝な表情を浮かべた。

「……どういう意味です？」

少しの間の後、答えが返って来る。

「……巷で言う『乙女の秘密』ってヤツかな」

その二（後書き）

まさかまさかの更新です。

多分、次の更新は空くと思います（汗

正直、堀よりも明さんの方が目立ったんじゃない？ と思わずにはいられません。

……まあ、多分誰もが判っている通り、所詮夢才チですから（あ

その三

次の日、堀は安堵した。

何故なら、朝、京子に挨拶をした時に、

「おはようございます、渋谷さん」

「……………ふん」

彼女が、数秒間目を合わせてくれたからだ。

昨日なら、恐らく空気として扱われていただろう。

少しずつだが、彼女の心証は良くなっている様だ。

この調子なら、いずれは仲違いも無くなる筈。

今は一言も会話してくれないが、耐える事にしよう。

そんな事を考えながら、今は昼休みの図書室。

図書委員である堀は、受付で本を読んでいた。

大きな窓から昼の陽光が差し込むので、電灯が要らない程に明るい室内。

今日は特に人も来ず、棗も来ない。

閑散とした図書室で、堀は静かに本を読んでいた。

とは言え、受付の業務をする時以外は、特に誰かと話す訳ではない。

棗と適当に言葉を交わす程度で、後は延々と読書に耽る。

だから、今日も大方いつも通りだった。

次の瞬間までは。

「なっ…………何でアンタがここに居るのよ？」

図書室の扉が開いたと同時に聞こえた声で、堀は全てを察した。案の定、図書室に入って来たのは京子だった。

「僕、図書委員なので」

堀は笑顔で応えるが、京子は完全に無視する。

そして、図書室の奥の方へと向かった。

大体想定の内なので、堀は特に気にせず、本を読み続ける。

だが、京子はすぐに受付まで戻り、堀に尋ねた。
「……脚立、ある？」

開いた窓から、そよ風と陽光が差し込む図書室。

脚立の上に乗った京子が、高い棚の上に手を伸ばしていた。それは少々危なっかしく、下手すると落ちてしまいそうだなので、堀は京子の傍に居る事にした。

もちろん、京子はそんな気遣いに気付く気配すら無い。

「か、勘違いしないでよね。私は、本が読みたいだけなの。アంతに会いたかったとか、そんな事全然考えてないんだからね」
相変わらず言葉は辛辣だが、全盛期と比べれば棘は少ない。それに、自分から話してくれるのだから、悲観する事はないだろう。

「渋谷さんは、本を読むの好きなんですか？」

今なら、ちゃんとコミュニケーションが出来る。

そう判断した堀は、京子に積極的に話しかける。

京子は、棚の本を選びながら、

「……まあね」

しれっと答えた。

「そうなんですか。僕も好きなんですよ。この辺りの本はもう一通り」

「そんな事訊いてない！」

同じ趣味を見付け、嬉々とした口調で話す堀に、京子は一喝する。

勢いに押されて、堀は思わず黙ってしまった。

少し調子に乗りすぎただろうか。

そんな事を考えながら、堀は次の言葉を探す。

だが、次に口を開いたのは、

「あ、あの……その……」

京子だった。

「何ですか？」

「い、言おうとしてるんだから黙って聞きなさい！」
続きを促す堀に、京子は顔を紅くして叫ぶ。

そして、暫く言葉を濁し、散々躊躇った後で、

「あ……ありがとね……」

やはり躊躇いながらも言葉を発した。

趣旨が掴めず、堀は首を傾げる。

「……何が、ですか？」

「き、昨日……助けて……くれたじゃない。だから……」

堀の問いに、京子は言葉を詰まらせながら答えた。

その言葉は、堀にとって意外なものだった。

何だかんだで、昨日は例の一つも言わなかったのに。

本当に、彼女は京子なのだろうか。

そんな疑問すら浮かんできてしまう程だ。

当の彼女は、更に続ける。どんどん顔を赤らめながら。

「あの時は……何も言えなかったけど……お礼くらいしないと
でしょ？」

本当に……怖くて……どうなるんだろうって思ってたから……。

……正直、あの時のアンタ……ほんのちよつとだけ……その……

先細りしていく声は、とうとう聞こえなくなった。

顔はこの上無い程に真っ赤になり、湯気でも出てきそうだ。

「ほんのちよつと……何ですか？」

「な、何でもないわよ」

堀は続きを促そうとしたが、今度ははぐらかされた。

「そんな事言われると、却って気にな」

「五月蠅い五月蠅い五月蠅い！ とにかく何でもないの！」

そして、それはすぐに拒否に変わる。

仕方無いので、これ以上の言及は諦めた。

京子は悪態を吐きながら、更に本を探す。

そんな彼女を、堀は小さく笑いながら見ていた。

何はともあれ、お礼をして貰えたのだ。

自分と彼女の距離が、少しずつ縮まっている証拠である。

……否、もう彼女は、あの事を本気で怒ってはいない筈。

恐らく、強気な一面が、彼女の足枷になっているのだろう。

あとは、時間がどうにかしてくれるのを待つだけだ。

そう考えている最中、窓から少し強い風が吹き込んだ。

外の広葉樹がざわざわと揺れる音も、同時に入ってくる。

「……縞……」

思わず呟きかけた言葉を、堀は必死に飲み込んだ。

先日の子の舞いにならない為に。

それは、神風だった。

窓から入ってきたそれは、本棚相手に夢中になっている京子を包み、スカートをカーテンの様にはためかせる。

それによつて、絶妙なチャリズムが完成した。

見えそうで見えなくて、でもやはり見えるという、旬のイチゴの様に甘酸っぱいそれだ。

しかも、脚立に乗っているのです、丁度堀の目の高さで展開されている。

それは、間違い無く神風だった。

「……………？　どうかした？」

何かに勘付いたのか、京子が堀の方を向く。

だが、その時には既に、気紛れな神の恩恵は終わっていた。

「い、いえ！　何でもないです！」

焦った堀は、上擦った声で答える。

その直後、己が小心振りを呪うが、時既に遅し。

「何よ、逆に気になるじゃない。怒らないからはつきり言いなさいよ」

そんな事を言う人が、怒らなかった例はない。

それ以前に、そうやって迫る様から既に怒気を感じる。

「渋谷さんだって言わなかったじゃないですか。僕も言いませんよ」

「五月蠅い五月蠅い五月蠅い！ それはそれ、これはこれ！ とにかく黙って言いなさいよ！」

「『黙って言う』って明らかに矛盾して」

「判ってるわよ！ ニュアンスで察しな……うわぁ！？」

掛け合いに気を取られたのか、京子は脚立の上でふらついた。不安定な足場なので、間も無く足を踏み外す。

腕に抱えていた本をばら撒き、そのまま倒れていく。

「渋谷さん！？」

堀は、京子を慌てて抱き留めた。

が、京子の体重に耐え切れず、そのまま後ろに倒れてしまう。受け身も取れないまま、堀は背中から床にぶつかった。

「ひゃん！」

「きゃッ！」

二人分の悲鳴が聞こえ、数秒の静寂。

「だ、大丈夫ですか、渋谷さん？」

「まあ、ね。アンタこそ頭とか……」

堀の問いに答えようとした京子が、急に口を開けたまま固まった。怪訝な思いを抱いた堀は、今の状況を確認する。

二人しか居ない、閑散とした図書室。

京子の吐息はおるか、心拍の音まで聞こえる程の距離。

重なり合う二人の肌。

押し付けられている二つの膨らみ。

京子が押し倒したとも、自分が抱き寄せたとも受け取れる光景。

それらを確認し終えた時には、京子の顔は真っ赤に染まっていた。同時に、凄まじい殺気を感じる。

京子は堀の身体から降り、近くに落とした分厚い本を手にとった。そして、

「こ、このケダモノ——！！！！」

それから保健室のベッドで目覚めるまでの間の事を、堀は良く覚えていない。

その日の夜、アリスにメールで呼び出され、堀は夜の学校に向かった。

校門の前には、

「夜の学校に望月さんと二人つきり……くあ——！　興奮するっス！」

「あの、マコちゃん……周り見えてる？　勝手に人数減らさないで欲しいんだけど」

相変わらずの二人と、

「……………」

彼女らに呼び出されたのだろう、少し不機嫌そうな京子の三人が立っていた。

堀の姿に気付き、アリスは笑顔で迎える。

「やつほー、堀君。こんな時間にゴメンね」

「いえ、別に良いんですけど……どうしたんですか？」

メールには場所と時間しか書かれていなかったため、堀は面と向かって尋ねる。

待ってましたと言わんばかりに、アリスは何かを企んでいる笑顔を見せた。

「シブシブの歓迎肝試しだよ」

「……………え？」

アリスの言葉に、堀はもちろん、京子までもが呆然とした。

そんな二人にはお構いなしに、アリスは説明を続ける。

「シブシブには早く学校に馴染んで欲しいからね。ボク達からのさやかなプレゼントだよ」

その後続けて、真琴が説明する。

「校舎内の六つのポイントを回って貰うっス。

それぞれに散らばった、望月さんの嬉し恥ずかし盗撮写真六枚を集めればクリア！

その写真を記念品としてお持ち帰り出来るっス！」

真琴の言葉を聞いて、今度はアリスの表情が変わった。
ぎこちない笑みで、真琴と顔を合わせる。

アリスのアイコンタクトに真琴が返した返事は、満面の笑顔とVサインだった。

「で、どうして僕が？」

「渋谷さんが道に迷ったりしないようにっス。私達は主催者っスし
すっかり生気を失ったアリスに代わって、真琴が質問に答える。
もちろん、この二人が裏で考えている事は、堀には容易に想像出
来た。

大方、自分と京子の仲を取り持つつもりなのだろう。

だが、自分とはともかく、問題は……。

「私、帰る」

面倒臭そうな声で言い、京子は言葉通り校門から離れていく。

—— やっぱり、そうですね……。

予想通りの展開に、堀は溜息を吐いた。

そもそも、京子が自分と一緒に肝試しなんてする訳が無い。

真琴は慌てて、隅の方でうずくまっているアリスに声を掛ける。

「望月さん、非常事態っス！」

「……どうでも良い」

「渋谷さんを止めないと！ 何とか説得して欲しいっス！」

「……もう、中止で良いんじゃない？」

「煮ちゃんと幼津部、どっちに晒されたいっスか？」

「よーし、ガンバるよー！」

真琴の『励まし』で復活したアリスは、京子を追い掛け、前に立
ちふさがった。「」

「もう、ノリが悪いよ、シブシブ」

「何で、私があんな奴と肝試ししないといけないのよ？」

人懐こく言うアリスに、京子はもっともな反論をした。

どうやら、『シブシブ』に関しては容認したらしい。

正攻法では落とせないと判断したのか、アリスは今度は目を潤ませる。

「ヒドいよシブシブ……。ボクやマコちゃんが、シブシブの為に企画したのに」

「う……………」

今にも泣き出しそうなアリスに、京子はたじろいだ。

やはり、幼女の涙は強力らしい。

だが、京子はそれを振り切った。

「な、泣き落とそうだったって、そうはいかないわ」

「うう……………判ったよ。じゃあ、せめて一人で良いから行ってきて。

準備に手間が掛かってるんだから、それくらいしてくれても良いよね？」

万策尽きたらしく、アリスは溜息混じりに言った。

京子は、まだ堀を受け入れられないようである。

これも、仕方のない事であろう。

何せ、今日の昼に、また新たなトラブルが生じたのだから。

逆恨みもいいところだが、理屈で割り切れないのが人の心だ。

また暫くは、京子に無視され続ける生活を甘受しよう。

そんな事を考えていた時、堀は京子の異変に気付いた。

アリスの言葉を最後に、何も答えないのである。

それは、何かに戸惑っている様な仕草だった。

「だ、だから、そういうのはいいってば。」

私一人にそんな大層な事されても、重いと言うか苦しいと言うか…

…その……………」

先程までとは明らかに違う、躊躇いがちな弱々しい声。

まるで、何かを隠しているかの様だ。

「もしかしてシブシブ……………こういうの苦手？」

そして、アリスの一言が、見事に京子を貫いた。

いよいよ京子は赤面し、全力で否定する。

「な……………ッ！？ ち、違うわよ！ 私、ここまで厚遇しなくてい

いつて言ってるの！

夜道を歩くだけで怖いとか、友達に無理矢理見せられたホラー映画のオープニングで気絶したとかじゃないんだからね！」

「ふーん、そんなに苦手なんだ。その方が怖がらせ甲斐があつて良
いけどね」

「な、何で判つたの！？」

「今言つたでしょ……」

どこぞの新喜劇の様な会話の最中、真琴はいつの間にか京子の背後に移動していた。

京子を挟んで、アリスと交わすアイコンタクト。

抜群のタイミングを見計らい、真琴は人差し指で京子の背中を突いた。

「いやあああああああああああああッ！！！！！」

夜空に轟く、京子の悲鳴。

京子はアリスを押し退けると、全速力で駆けていった。

数分後——どこかを一周してきたらしく——堀の居る校門前に現れる。

突撃の様な勢いで堀に抱き付くと、荒れた息を整え始めた。

一連の流れに、堀は只々果然としていた。

少し落ち着いた時、アリスが京子に歩み寄る。

その笑顔は、幼子の無邪気さと残酷さを、この上無い程孕んでいた。

「一人でいく？ それとも二人？」

「あは……あははは……」

京子の答えは、最早一つしか無い。

その三（後書き）

私のバイト先には、よく怒る事で知られている副店長と、割と穏和な副店長が居ます。

先日、穏和な方の副店長に、とあるミスで思いつきり怒られました。よく怒る方の副店長には好い加減慣れていたのですが、穏和な方には始めて怒られたので、かなりビビりました。

正直、記憶に焼き付いて離れません。

普段怒らない人の方が怒ると怖いとよく言いますが、まさにその通りだと思いました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4110b/>

Hori meets Girl

2010年10月11日20時15分発行